



👁️👁️ みどころ

日本では袴田事件の再審請求が注目されている。また、松川事件、八海事件等の冤罪を巡る暗い“負の歴史”もある。しかるに、『私がやりました』とは一体ナニ？

本作は、90年前の戯曲をフランソワ・オゾン監督が、①コメディへの回帰、②今だからこその女性の映画を、③嘘の芸術性、④女性を巡る環境、という視点から書き換えたものだが、その面白さは、ブロードウェイの人気ミュージカルを映画化した、本作とよく似た設定(?)の『シカゴ』(02年)と対比すれば、より際立ってくる。

美女の被疑者(被告人)と凄腕弁護士がコンビを組めば、“正当防衛による無罪!”なんてチョロイもの・・・?無罪判決と世間に新たな女の生き方を見せつけたことによって、さえない女優は、たちまちスターの階段を駆け上ることに。

ああ、それなのに本作では、今は落ちぶれたサイレント時代の大女優が登場し、「真犯人は私よ!」と名乗り出たから、アレレ。私は、来年3月に弁護士50周年を迎えるが、“犯人の座の奪い合い”を目撃したことはない。こりゃ、解決不可能!そう思ったが、いやいや意外にも、“三方よし”の結末に至る姿(コメディ?)をしっかりと確認しよう。

■□■これは何の映画?冒頭に見る2人の美女は?■□■

私は本作のタイトルを見て、一瞬、“今ドキのくだらない邦画”だと思った。ところが、チラシには2人の美女が写っているうえ、“フランス映画の華”とも言うべき女優イザベル・ユペールの顔が映っていた。そこで調べてみると、本作の脚本を書き、監督したのは

フランソワ・オズンだったからビックリ！本作は『8人の女たち』（02年）、『しあわせの雨傘』（10年）（『シネマ26』166頁）に続く、彼の3部作の最終章になるらしい。本作のチラシには「有名映画プロデューサー殺人事件。「犯人の座」をめぐり3人の女たちが繰り広げる、クライムミステリー！」「パリの大豪邸で起こった、有名映画プロデューサー殺人事件。容疑者から一躍人気スターになった若手女優の前に、真犯人を名乗る女が現れー？」と書かれている。こりゃ、面白そう！こりゃ必見！

日本では近時、袴田事件の再審請求を巡る報道が続いているが、これは戦後直後に起きた松川事件、八海事件等の冤罪事件に続く系譜だ。冤罪事件と再審事件は、「私はやっていません！」（＝私は殺人犯ではありません）を巡る闘いだが、本作のタイトルはその逆で、何と「私がやりました！」＝「私が殺人犯です！」というものだからビックリ。こりゃ一体何？本作は一体何の映画？

『ラ・ボエーム ニューヨーク 愛の歌』（22年）は、ニューヨークの屋根裏部屋に住む3人の若く貧しいアーティストたちが主人公だったが、本作はパリのアパートに住む、売れない女優マドレーヌ（ナディア・テレスキウィッツ）と、駆け出しの女弁護士ポーリーヌ（レベッカ・マルデル）が主人公で、冒頭にはポーリーヌが大家から滞納家賃を督促される姿が映し出される。2人とも“美人度”は相当なものなのに、なぜこんな貧乏暮らしをしているの？そう思っていると・・・。

■設定とテーマは『シカゴ』そっくり！殺人事件が勃発！■

ブロードウェイの人気ミュージカルを映画化し、03年の第75回アカデミー賞で最優秀作品賞、最優秀助演女優賞など最多6部門を獲得したのが『シカゴ』（02年）（『シネマ2』59頁）だった。同作の主演は、ロキシー（レニー・ゼルウィガー）とヴェルマ（キャサリン・ゼタ＝ジョーンズ）という2人の歌姫（ダンサー）だが、ロキシーの“不倫殺人事件”が発生し、リチャード・ギア演じる凄腕弁護士が登場し、裁判のシーンになると、その有罪、無罪を巡って白熱の展開になっていった。

『シカゴ』は、しがたない亭主持ちの売れないダンサーであるロキシーが、「ショーに売り込んでやる」と、誘惑されてベッドを共にした愛人が、コトが終わると、「売り込んでやるなんてウソさ。知り合いのプロデューサーなんかいないよ。もう俺につきまとうな」と言われたことに端を発した殺人事件だった。それと同じように（?）、本作でピストルによって撃ち殺された男は、有名プロデューサーのモンフェラン（ジャン＝クリストフ・ブヴェ）。マドレーヌはモンフェランから役をもらうことの引き換えに“愛人契約”を要求されたうえ、強姦されそうになったため、辛うじてその場を逃げ出したようだ。

ところが、その日の夜、マドレーヌとポーリーヌが住むアパートを訪ねてきた警部から、「モンフェランが射殺された」と聞かされたうえ、マドレーヌは「パリを離れるな」と釘を刺されたから、アレレ。マドレーヌは殺人事件の容疑者なの？それとも参考人なの？ポーリーヌから「証人になれば日当がもらえる」と告げられたマドレーヌは翌日、ラビュセ

判事（ファブリス・ルキーニ）の下を訪れ、彼の尋問を受けることになったが・・・。

■□原作は？オゾン監督の狙いは？■□

本作の原作になったのは、劇作家のジョルジュ・ベルとルイ・ヴェルヌイユが共同で 1934 年に書いた戯曲『真実の告白』＝『Mon Crime』。これは、約 90 年前の作品だから、パンフレットの中でオゾン監督は、①コメディへの回帰、②今だからこそその女性の映画を、③ウソの芸術性、④女性をめぐる環境、という視点から大幅に書き換えたことを分かりやすく解説している。

さらに、パンフレットにあるコラム、松崎健夫氏（映画評論家）の「約 90 年の時を経て、母国・フランスへ戻ってきた“闘い”の物語」によると、この戯曲はこれまで 2 度にわたって映画化されてきたものらしい。さあ、オゾン監督はそんな 90 年前の有名な劇曲を、いかに書き換えて現代風にアレンジした傑作に仕上げていくの？

■□殺人事件を巡る予審判事と弁護士の攻防戦にビックリ！■□

治安維持法の時代における、検閲官 VS 劇作家を主人公にした、三谷幸喜の『笑の大学』（04 年）（『シネマ 6』249 頁）はめちゃ面白い映画だった。1935 年当時のフランスにおける予審判事の役割は私にはよくわからないが、本作では『笑の大学』における検閲官 VS 劇作家のやりとりと同じような（？）、モンフェランの射殺死亡事件を巡る、ラビュセ予審判事とポーリーヌ弁護士との攻防戦に注目！

「捨てられた愛人の恨みによる殺人」という筋書きを考えていた予審判事に対して、ポーリーヌが「男に襲われた身持ちのいい女が、名誉と身を守る



2024 年 4 月 3 日発売 『私がいきました』

Blu-ray : ¥5,390 (税込)

DVD : ¥4,290 (税込)

発売・販売元：ギャガ

© 2023 MANDARIN & COMPAGNIE - FOZ - GAUMONT - FRANCE
2 CINEMA - SCOPE PICTURES - PLAYTIME PRODUCTION

ため反撃した」と新たな筋書きを提案！それなら「正当防衛だ」と判事がのつつかると、「彼の銃で殺しました」とマドレーヌは嘘の自供を。すると、「よござ告白してくれた」と予審判事は事件解決（？）に浮かれ、取調室は和気藹々のお祝いムードになったから私はビックリ！

1930年代のフランスの司法では、こんな密室での裏取引（？）が堂々とまかり通っていたの？『シカゴ』でも、殺人事件を巡るさまざまなやり取りに驚かされたが、本作に見る予審判事と弁護士のそんな密室劇（裏取引）の姿に、21世紀を生きる弁護士の私はビックリ！

■□■白熱する法廷シーン！本作 VS 『シカゴ』 ■□■

私は『シカゴ』の評論で、一方では「殺人事件、陪審員、凄腕弁護士というストーリー展開もアメリカのシステムを大前提とするもの。従って、この映画はすべてが良くも悪くもアメリカ的なものに仕上がっている。」と書き、他方で「不倫殺人を犯しながら、凄腕弁護士のゲーム感覚による活躍により陪審員がコロリと騙された挙句、無罪となっていくというストーリー展開には、やはり弁護士として抵抗感がある」と書いた。同作は、ミュージカル映画の中で、ロキシーが有罪か無罪かを巡る法廷シーンを巧みに取り込んだところがユニークだったが、本作はミュージカル映画ではないから、1930年代のフランスにおける法廷シーンの白熱した展開（？）をしっかりと勉強しながら、有罪・無罪の行方に注目したい。

そこで発揮されたのが、マドレーヌの女優としての演技力と、ポーリーヌの弁護士としての弁論術。しかも、それを2人の美女が熱演するのだから、男ばかりの陪審員はたちまちイチコロに・・・？ポーリーヌがマドレーヌ（被告人）のために書き上げた“スピーチ原稿”を、マドレーヌが自分でも驚くほどの演技力で語り切る法廷シーンに注目すれば、仮にあなたが陪審員であったとしても、きっと無罪の評決を・・・？

■□■生活は一変！そこに第3の女が登場！犯人は私よ！ ■□■

ジャニー喜多川氏の「性加害事件」を見ていると、「天国から地獄へ」という言葉の意味がよくわかる。人間は絶頂期にある時ほど、用心してコトに当たらなければならないということだ。ところが、本作はそれとは正反対に、つまり、モンフェラン殺しの裁判でマドレーヌが正当防衛によって無罪とされたことにより、たちまち、か弱い女であるにもかかわらず、己を守るためモンフェランを射殺したマドレーヌは女の鏡だ、とマスコミがもてはやしたため、マドレーヌとポーリーヌの生活は一変！マドレーヌの元には映画や舞台への出演オファーが殺到、たちまちスターへの階段を駆け上がることに。さらに、心を入れ替えたアンドレ（エドゥアール・スルピス）ともヨリを戻したマドレーヌは、『シカゴ』のプリン弁護士以上の腕利き弁護士になったポーリーヌと共に豪邸に引っ越し、まさに我が世の春を謳歌していた。

ところが、そんな2人の元へ、サイレント映画時代の大女優で、今はすっかり落ちぶれ

たオデット（イザベル・ユペール）が登場！「プロデューサー殺しの真犯人は私だ！」「マドレーヌたちが手にした富も名誉も私のものだ！」と言い張ったから、アレレ。オデットが「私が犯人よ」と名乗り出たことによって、一体何がどう変わるというの？そこら辺りは弁護士の私が考えても難しいところだが、卓越した脚本家でもあるオゾン監督なら、約90年前の原作を生かしつつ、なんと面白いコメディ劇を演出することができるはずだ。ちなみに、オデット役を演じたイザベル・ユペールは、『私はモーリーン・カーニー 正義を殺すのは誰？』（22年）で、原子力発電会社大手アレバの労働組合の伝説的な女性像を、毅然とした姿で演じていたが、どちらかという、私は同作のそれより、本作のオデット役の方が好き！

■□■解決不能？いやいや、意外にも“三方よし”の結末に！■□■

オデットが「私が犯人よ」と名乗り出ても、マドレーヌなればこそ成立し得た、「カ弱い女性が、我が身を守るための正当防衛！正当な女性の権利行使に拍手！これぞ女性の鏡！」となるかどうかは、ポーリーヌの言う通り微妙だ。オデットもそれが分かっていたためか、一方で口止め料による和解案（？）を提案したから、なるほど、なるほど。こうなると、弁護士のポーリーヌの知恵と交渉術の見せどころだが、オデットの方も伊達に歳は取っていないから、相当したたかだ。マドレーヌとポーリーヌは今、豪華な家に住み、豪華な生活を営んでいたが、手元現金をたっぷり持っているわけではない。それはポーリーヌが説明する通りだ。しかし、オデットが突きつけた和解条件は厳しいものだったから、さあ、ポーリーヌはいかなる知恵を？

そこで、「大量の現金を持つ男」「それを動かせる男」としてポーリーヌが目をつけたのは、ボナール・タイヤのオーナーであるアンドレの父親（アンドレ・デュソリエ）だ。かつて、「金持ちの娘と結婚するので、君は僕の愛人になってくれ」と馬鹿げた提案をシャーシャーとしていたアンドレも、今は心を入れ替え、父親がいくら反対してもマドレーヌと結婚し、「自分も働く」と宣言するまでに変化したことに着目したポーリーヌの戦略は？アンドレの父親は今でもアンドレがマドレーヌと結婚することを知らされていないから、それをうまく父親に伝えたら、マドレーヌとポーリーヌがオデットに支払うべき和解金は何とか入手できるのでは？そう考えたポーリーヌの計算（策略？）はお見事だ。

日本には「近江商人と三方よし」という言葉がある。これは、「商売において売り手と買い手が満足するのは当然のこと、社会に貢献できてこそよい商売といえる」という考え方で、「売り手によし、買い手によし、世間によし」を表す言葉が「三方よし」だ。知恵を絞ったポーリーヌがアンドレの父親の部屋に乗り込み、その弁論術と交渉術をフルに使って交渉すると、本作はまさに「三方よし」の結末に！

2023（令和5）年11月9日記